

第 3 回 共同研究会 記録

年間テーマ	現代日本人の生き方を考える		
第3回テーマ	自然と開発		
日 時	昭和47年9月30日(土)	13:30	— 16:30
提 案 者	研究生	竹内 城	野尻 英寛
	研究員	木村 久吉	
司 会		出雲路 暢良	

提案1 野尻 英寛

田中首相が「国土開発および都市問題」についてのビジョンを「日本列島改造論」として発表しましたが、この構想は、国民が今なによりも求めているのは、人口・産業の再配置による過密、過疎の弊害の同時解消であり、美しく住みよい国土の実現である。……と私たちは理解するとともに、その目的にむかって有効適切な行政措置が打ち出されることを願ってきたわけですが、改造論構想の発表と相前後して「25万都市の候補地、大都市と地方を結ぶ道路、鉄道の主要路線には早くも土地ブローカが横行し、いたるところで地価高騰が目立っています。

ここから不動産会社・観光会社による自然の破壊が始まるといっても過言でないと思います。

「改造論懇談会」では、総合的な方向性→人口・産業の再配置による過密・過疎の同時解決— については賛成しながらも、委員の大半は問題点を指摘、独自の提言を行っており、土地問題については、ほとんどの委員が強力な地価対策と土地利用計画の必要性を強調しています。「土地の私的利用権の完全制限」との強硬意見から「土地保有税」「投機的な土地所有の分離課税」などで、今や土地対策については実行あるのみだとして、土地問題が列島改造論の

「重要なカギ」であることを端的に指摘しています。

改造論の根幹となる産業・人口の再配置と25万都市構想についても、①政府官庁・大学の新都市への移転 ②新幹線など交通網の整備、などを条件に賛成意見が多い。

半面「過密の地方拡散」「公害バラまき」と批判もでている。こうした不安解消のためにも「モデル都市の建設で示せ」「個性ある新都市づくりが先決」「既存のコンビナート公害の完全解決を優先させるべきだ」などの意見も多く「公害バラまき」の根強さをみせている。

また、国土改造に対して住民参加の必要性を強調したこともみのがせない点です。

従来、地域開発といえは産業開発または工業開発と解されることが多かったが、最近では、社会福祉が重視され、単なる経済開発だけでなく、社会文化面の開発、人間の生活環境の整備が強調され、北陸三県でそれぞれ定めている長期県勢計画においても共通してうかがわれるように、人間尊重を基調として、人間、産業、自然の調和をはかりながら→産業中心の「経済開発」への反省をこめて「社会開発」が提唱され、社会資本の整備のほか、社会保障の充実、社会福祉の増進、教育の向上、公害の除去、自然環境の保護など人間尊重の理念にもとづく豊かな

地域社会の建設と地域住民の生活環境の向上をはかることが新しく地域開発の主要課題となってきたのではないのでしょうか。

石川県 県勢発展計画 (47/4策定)

1. 計画の期間 昭和47年度から51年まで
2. 計画の目標
 - (1) すべての県民が豊かで明るい健康な生活を楽しむ高福祉社会を実現する。
 - (2) このため、人間優先を基本姿勢として、地域格差を是正し調和と秩序ある発展をはかる。
 - (3) 基本戦略として新しい交通ネットワークを軸とした産業の開発と生活関連施設の充実をすすめる。
3. 計画の内容

「快適で豊かな生活と生産の環境」を創造することを基本的として、次の施策を展開する。

- | | |
|-------------|---|
| (1)交通通信網の整備 | (6)自然の保全 |
| (2)産業構造の高度化 | ↑
<u>都市化の進展にもない、人間性回復の場として自然はますます重要となるので県民の貴重な遺産として、その保全につとめる。</u> |
| (3)生活環境の整備 | |
| (4)社会福祉の充実 | |
| (5)生涯教育の推進 | |
| (6) | |

北陸経済連合会 「能登開発の基本構想」

(目標年次60年)

能登の自然的、歴史的資源の保存ならびに地域住民の福祉の向上を基本理念とする。

能登開発の構想

今後の能登開発にとって最も大きいウエイト

を持つのは観光開発である。能登は自然的歴史的観光資源に恵まれており、それらを有効に活用することにより、能登をわが国の一大レクリエーション基地とすることが可能である。その場合、注意しなければならないのは自然の保護である。観光開発と自然保護は決して対立するものではなく、創意工夫によって調和点を見いだせるものと考える。

能登地域住民の所得向上には、観光産業のみでは不十分であり、その他の産業の振興、開発もゆるがせにできない。しかし、産業の振興開発に際して、能登の自然的歴史的資源の破壊をもたらすことのないよう万全の対策が講じられなければならない。

「世界の公園」といわれるスイス・アルプス年間の観光客が626万人それによる売り上げ約2,385億円、日本の5倍ほどの収益をあげている観光のメッカだが、驚くほどの静けさ。こゝも静かなのはなぜだろう。自動車道路がないからである。ユングフラウ(4,158m)、モンシュ(4,099m)、アイガー(3,970m)への登山口、グリンデルワルトの町標高1,034mから先には車道がない、いや車道をつくらうとしないのである。

アメリカでは「公園から車を締め出そう」という声があつた。アメリカ内務省国立公園局の「自然保護に関する特別諮問委員会」が、「国立公園に自動車を入れてはならない」と警告したものの。スイスのように初めから道路を取りつけない方針で進んだのと違って、アメリカの場合は今まで利用していた自動車をストップさせようというのだから、かなり思い切った警告といえる。

日本ではどうか。こと環境問題になると、なにごとにつけても劣悪の状態だが、国立公園

についても残念なことには例外ではない。そのいい例が、北海道の大雪山国立公園のケースで、自動車を締め出すどころか、これから観光道路を作ろうとしているのです。

広大な自然をかかえていてなお「保護のために自動車をシャットアウト」するアメリカ。この狭い日本で、日ごとにむしばまれていく自然をみながら、また、その自動車を通そうという日本。

無謀な自然破壊を続けながら、それに気づかず、いまだに観光道路を作ろうとする日本のやり方は、夜を見ようとしてサーチライトで照らし、静寂を聞こうとして拡声機を取りつける愚かな行為にも似ているといわねばなりません。

私たちは、自分のもの他人のものにはきわめて厳格な区分をして、それぞれ大切に取扱いますが、一たん公共のものとなると、たとえば、公園や道路などにおける状況はどうでしょうか。木の枝を折ったり草花をいためたり、紙屑を散らかすことが、いとも無神経に行なわれています。自分の庭をよごしたり、家の庭木を折ったりすることはありません。

私たちは、育ってきた環境が悪かったのか、教えられ方が間違っていたのか、とにかく考え方を根本的に反省してみる必要があると思います。私が中学2年のときでした。太平洋戦争のさなか、いたづら盛りの頃でした。教室であるガキ大将が、椅子をこわして火鉢の中に入れて燃やしたのが先生にみづかり、全員が大目玉をくったことがあります。その時の先生は「公共の物をこわしたらソ連では死刑になるんだぞ」といって注意され、公共の大切さを力説されたことを覚えています。

かけがえのない人類の共有の財産である自然を、私たち家庭の庭と同じように、きれいに豊

かに育てていくことが、人間の義務であると考えます。

提案2 竹内 城

国、県共に土地利用の70%は森林である。自然と開発は相反するものであるが、森林と云う自然に対する開発には次のものがある。即ち、農地改革、宅地、道路、観光施設、上石の採取、ダム建設。また林業そのものも森林を破壊している。

林道は1ヘクタール13メートルあればよい。石川県は4.7メートルである。しかし、林道をつくる際ののり面の緑化、セメントふきつけ等が自然を守る事によいのかどうか問題になる。

森林には生産的機能、経済的機能、公益的機能がある。公益的機能には、水資源確保、国土保全、保健的機能、大気の浄化があるが、これらは経済的機能と相反するかどうかと云う問題がある。

県の保護策として、保安林を設けて禁伐にしている。例えば択伐、30%以上は切らせない。保安林には17種ある。

短伐期施業、皆伐施業も問題になる。森林を育てるのに長い時間がかかる。薬をまいて下刈を省略する。化学肥料を使う。また、山を裸にすると30年は森林としての機能を果さない。

提案3 木村 久吉

氷河期に入って高山植物みたいものしなくなり植物の数が減った。ところが日本の氷河期は今の北海道位の寒さで、あまり関係なかった。だから日本の植物の種類は2万5千種とものごく多い。また、杉、ヒノキ、高野マキなど日本特産の植物の種類が多い。ヨーロッパ人にしてみると日本は植物園である。

日本は木を切ってもすぐ緑に復活する可能性を持っている。だから、保護の感覚が非常に遅れている。

バイカル湖に関して問題が起きた。パルプ工場を造ろうと云うのです。するとシベリアの人は反対するのです。聖なる湖を汚してなるかというわけです。それで、植物学者、動物学者、地質学者を総動員して大討論するわけです。パルプ工場のスケールが随分小さくなったという次第です。

日本ではすぐ緑が回復する所だから、自然を自分の財産の様に思っている。無私物は自分の財産にして取ってもよろしいという考えが支配している。自然が皆の財産だという思想がないのは、人間の力が小さく自然が非常に大きい時に、少しのことはしてもすぐ回復してくれたからだ。ヨーロッパ人は厳しい自然の中に生きていたものだから早いうちから自然を守る国に発展してきた。公共のもの、自然全部が全ての人の財産であるという思想がヨーロッパには徹底している。日本人には欠けている。

これは社会機構も関係しているかも知れない。自然を開発して皆に使わせるんだぞ、という。しかし、やはり自然全体は国民全体の財産であって、子孫にそのまま大事に残すべきものである。

自然で炭酸ガスを出している分は植物、動物、バクテリアの種類で440億トン、これを吸い込んで、植物が緑を増やしている分がこれ440億トンで、大体バランスをとっている。この植物の出す酸素を吸って我々は生きている。酸素は自然でないといつくれない。人間にはつくれない。ところで最近、石油をどんどん燃やすなど、人類は自然に対して10分の1の力で以って可変に参画している。へたをすると、石油がなく

なるどころではなく、人類にとって先行が恐しいんじゃないかと思うのです。

出雲路 今までのところを乱暴にまとめてみます。第1に、何故自然を保護するのか。経済効率が良ければどどんやりゃ良いじゃないか。例えば農村問題研究会から問題が出てきた。つまり、除草剤とか農薬を使う今の農業は消費者からみれば困る。ところがそれをしないで農業が成り立つか、農民の生活が成り立つかという問題がある。何故保護が必要かという問題です。

次に、現在破壊の現状はどうなっているかという現状分析が必要です。破壊の現状は進展していく性格のものでありますから、厳密に押える必要があります。

ここまでは若干の提案があったと思います。

次に問題になるのは、何が破壊を生んでいるのか、破壊の主体は誰なのかと云う事です。そのへんから討議にはいっていきたいと思います。

野尻 観光業者はもちろん、個人以外の法人。個人では破壊したくないが、業者としてやってしまおう。

福村 35年あたりから企業が動き出して国中に広がった。それに対応する先を見越したビジョン、方策が国にたっていないから企業にかきまわされ、国民が巻き込まれた。

谷口 自然無視の経済優先で本当に幸福になれるのかどうかを吟味せねばならない。

大宮 人口の増加と飽くなき文明の追求の姿勢がそうさせたんじゃないか。無批判な科学文明の取り入れといった事があげられるんじゃないか。

出雲路 木村先生、人間が増殖したことは自然の一現象でしょうか。そして、そういう事が可能な様に人間はつくってきたという事自体は

どうなのでしょう。

木村 今から12、3年後、人口が50億位になって、絶大なる飢餓が訪ずれるであろうと読んだ事があります。人類は加速的に増加してもうギリギリじゃないかと思う。これに対する地球規模の対策はまだ無い。今の様な考え方が解決は無理でしょうね。

(女の人) 終戦後、食料が不足し国民が貧困になった。そこで引き揚げ者が来て人口が増加し、国は生活を保つ為に経済優先をした。そして機械企業が発達して公害が出来る。

矢ヶ崎 終戦直後は引き揚げ者で人口増加したという事はあった。後は日本では少ないんです。むしろ後進国の方が非常に激しい人口増加をしている。地球全体から見ると、人口が増えて、それに対する食料をどうするかという、人類全体の問題なのです。

(後藤) 人口問題が自然破壊に密接な関わりを持つのではないか。

自然破壊は企業とか地方自治体が非常に原因になっている。しかし、企業がやって、その結果困っているというのが現在の実状じゃないか。いつも企業や地方自治体ばかり責めていてもしょうがない。企業をやめてしまえば日本の、世界の生活がやっつけられるか。

そこで、日本はもう少し公害を防止する対策を持って。これが無ければ自然破壊の問題も難しい。国家が考えて動かねばどうにもならぬ。

ところで、日本では在来の植物を帰化植物が駆逐して強いのは何故でしょうか、木村先生。

木村 もともと日本の土は酸性だった。ところへコンクリートをするのと石灰分が少しづつ溶けてアルカリ性になる。そういうところが向こうの植物に好都合なんじゃないか。

(女) 今、後藤先生は公害対策が出来てな

いと云ったが、公害が出来てから公害対策をするんじゃなく、まず公害が起きないようにするのが先決。

出雲路 それは先程の福村さんの見透しの問題になる。

(女) 見透しがわかり切っている、企業が文明を造り上げなきゃいかん。後藤さんは、現在の日本の国民の生活を維持していく為にしようがないみたいな事を云ったが、現在の日本の文明をそんなに尊重しなきゃいけないのかな。谷口 個人にしても国家にしても自己中心的に考えている。この意識の転換という事に最後はなるんじゃないか。

出雲路 個人がどうこうするという事ではなしに、生活の、人間の全体との関わりの中で自分が責任の主体者だという意味での個の確立が欠けているということですね。これは、はっきりさせておかななくてはならない。

竹内 消費は善だということが戦後いつの間にか植え付けられた。消費する為に経済優先になり、必要以上に物を消費する。だから企業もどんどん開発されねばならない。そう云った事が自然を破壊した原因だと思う。

木村 企業には何かどうにもならぬ宿命があって、自然破壊しなきゃならないものを持っているのではないか。自然を大事にしようとか、緑を守ろうとかいう美辞麗句を並べる割には、その逆をやっている。竹内先生は、公害面の科学的追求が少な過ぎて、まるで個人がゴミを流すのが悪いと云う様な極めて良心的な反省の上に立っておられるのではないですか。

竹内 企業をやっている者も個人で、資本家も個人で、そう云うものを含めたものを云っておる。基盤はやはり企業、大資本。でも、それもやはり個人だと私は云っているのです。

二宮 自然に法則があるのと同じ様に社会にも、経済現象にも法則はある。企業は一定の性格を持たされて転げ出した以上法則的には止める事が出来ない。

出雲路 そうすると単に見透しの問題じゃなくなりますね。

二宮 自然の破壊についてだが、自然について2つの考え方がある。自然は人類より先に在ったのだという考え方と、自然は人間が見て、考えて、初めて自然であるという考え方と。

前者だと人間が人工的に自然に立ち向かうことがいけない事になる。ところが我々にとって耕作は必要な事、耕作が悪いわけではない。問題は自然へのクワの入れ方である。責任は社会組織、文化の政策と方向である。

木村 自然を汚してもまだ大気や川がきれいにしてくれてる時代は終わった。人類の先行は暗い。緑を作るところこそブルドーザーでも何でも使うべきだ。このままじゃ、いきづまる。

二宮 日本は色々な意味で西欧文化を取り入れたが、それは間違いだった。雑草の多い日本にはアジア的なものを取り込むべきだ。これからはアジアの中の日本という事で日本を見て行った方がよい。

出雲路 結局最後には文化の質の検討までやらなくてはまずいと云う事が基盤にある。もっと、1番先には個人の主体性の確立と云う事がある。単に個人が個人の領域で止まるという事ではなく、例えば企業自体の持つ性格を認識しなくちゃいけない。

あるいは、国や地方自治体に見透しが無い。

それから、文化の質の検討を生活の面についてみると、生活の質の転換という事になるのではないか。そこでは消費生活、娯楽生活をも検討する。

こう云った事が今日、私が気付いた事です。